

## 立教のボランティア活動前史と「ボランティアセンター」

松平 信久

2003年度の立教大学「ボランティアセンター」の設立は、当時の押見輝男総長の発議によっている。押見総長は「立教ヒューマン・ムーブメント構想」を提唱され、その構想の柱として、このセンターの設立を提案しスタートさせたのであった。

しかし、立教大学のボランティア活動は、この時をもってその開始時期とするわけではない。立教の設立者C・M・ウィリアムズ主教は、その俸給の大部分を教会や福祉施設の設立に献じ、また経済的に困難な状況にある人たちを支援して、この種の活動の率先垂範者となった。同主教の薫陶を受けた立教卒業生・石井亮一氏は、1891年に起きた濃尾大地震の際に子女の救済活動にあたり、その後、知的しょうがい児(者)教育のパイオニアとなった。ポール・ラッシュ氏による山梨県清里での活動、チャペル諸団体による日本各地での奉仕、セツルメントや「子ども会」などの地域活動、社会福祉研究所のボランティアビューロー、より近くには阪神淡路大震災での救援活動、チャペルに設置されていたボランティアセンターの歩みなど、多様なそして広範な活動が展開されてきたのである。

上述の立教のボランティア活動前史の中で代表的なものの一つが、ポール・ラッシュ氏による活動である。米国聖公会の宣教師であり、本学の教授でもあった同氏は、キリスト教にもとづく青年・学生活動の展開を目指して「祈祷と奉仕」を標語に掲げ、1927年に「聖徒アンデレ同胞会(The Brotherhood of St. Andrew = BSA)」を組織した。その研修・活動の場として山梨県清里に、立教大学の学生たちの勤労奉仕などによって清泉寮を建設したのである。さらに戦後間もなく清里農村センター(後、KEEP < Kiyosato Educational Experiment Project > 協会となる)を創設し、「食糧、健康、信仰、青年の希望」をモットーに高冷地での農業革新と青年教育を結びつける壮大な活動を展開した。

本学ボランティアセンターは、このような歩みの伝統や特色の継承・発展をはかりながら、それを大学全体としての教育活動、地域・社会貢献の一環として位置づけ、大学構成員全体の参加のもとに今日的課題に応えることを願っている。

私がセンター長の任にあった2003年9月から2006年3月までの2年半は、当センター発足に伴う土台作りの時期であった。諸大学が類似の機関を相次いで設立する中で、本学のセンターはその独自性を追い求めてきた。その独自性とは、KEEP協会の標語を模して言い表せば、「キリスト教の精神にもとづき、<くらしといのち>、<他者と共にある生き方>、<青少年の希望>を見つめ、考え、行動することであると言えよう。

さらに本センターは、小・中・高・大学からなる立教学院全体のボランティア活動の連携センターとなることも企図してきた。その一つの具体例が、本年度で10回目を迎えた、各校からの参加者による「立教学院清里環境ボランティアキャンプ」である。今後ともこのような学院全体のムーブメントを組織しつつ、本センターが活動を充実発展させていくことを心から願っている。

(立教学院元院長)